

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2019年 11月 9日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士課程2回生

氏 名 山守 瑠奈

助 成 の 種 類	令和元年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研 究 集 会 名	The 4th Asian Marine Biological symposium	
発 表 形 式	<input type="checkbox"/> 招 待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他(
発 表 題 目	Evolution of limpet-shaped shell in trochid snails: adaptation to two different environments	
開 催 場 所	台北市(台湾)	
渡 航 期 間	2019 年 11月 3日 ~ 2019年 11月 7日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	100,000円
	使用した助成金額	100,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助 成 金 の 使 途 内 訳	参加費： 18,568円
		渡航費： 53,340円
宿泊費： 40,000円		
(上記に助成金を充当)		
当財団の助成について	書類作成の段階からガイドラインが非常にわかりやすく、また手続きで躓いた際にも丁寧に教えていただけたので、書類作成にまだ慣れない学生の身でも、申請を最後まで完了することができると感じました。ありがとうございます。	

成果の概要 / 山守瑠奈

私はこの度、11月4日から6日にかけて台湾の台北市で開催された、アジア海洋生物会議 the 4th Asian Marine Biological symposium に参加させていただきました。当研究集会には、台湾・中国・韓国・タイを始めとして、アジア圏の様々な国の海洋生物研究者が参加しており、国の枠を越えて情報交換を行うことができました。中でも、自分の研究を行う上で何度も研究成果を参照させていただいた、尊敬する研究者の方々と直接お話しできたことはとても印象深い経験で、これからの研究の大きな励みになりました。

研究集会には口頭の部とポスターの部があり、ポスター発表の部では、私自身の扱っている共生性生物の宿主を研究している方の発表を聞くことが出来ました。当該種はフジツボの仲間のエボシガイ類の一種で、ウニを宿主としています。分布は赤道域が中心になっており、日本での採集は沖縄でしか出来ませんが、発表者の方は台湾およびベトナムで調査を行なっているとのことでした。今後情報を共有しあい、更なる研究の発展を目指していこうと意気投合しました。

自身の研究発表について私は、現在最も力を入れて研究をしている、巻貝類の笠型進化について口頭発表を行いました。概要は、巻貝がらせん巻きを失って笠型になる進化はどのような環境要因によって起こるのか、また笠型化の過程ではどのような形態の変遷が起こっているのか、というものです。私は日本の太平洋岸においてフィールド調査を重ね、狭い空間への住み込み共生（他の生物の作り出した巣穴で居候生活を行う共生系）および、荒波空間への進出に伴って、笠型の貝殻が獲得された、という結果を出していました。

本内容は国際誌 PLOS ONE に以前掲載されたもので、内容に関して多くの国の方から沢山の質問や建設的な意見をいただきました。特に多くいただいた質問は、巻貝の系統にある笠型の貝類は、子供の時はどのような形をしているのか、というものでした。答えはなんと、子供は巻貝の形をしています。そして大人になるにつれて巻きが解けて、左右対称の笠型になる、という発生様式を持つ仲間なのです。このように、特殊な形態を持つ貝は、発生の面でも非常に面白い研究対象となりえます。発表時間は12分間と質疑応答3分間でしたが、発表時間外にその10倍以上の時間をかけて、研究内容について海外の研究者の方と語り合うことができました。

そして、自身の発表に対して、Outstanding Student Oral Presentation Award を受賞し



発表のために演台上に立った時の様子（撮影：邊見由美）。背の高い外人仕様が身長が足りず、背伸びをしたら会場が笑いに包まれて暖かい空気になりました。

ました。英語で研究内容を伝えるという経験は未だあまり多くなく、少しでも緊張を和らげようと何度も練習を重ねていたため、非常に嬉しく思いました。受賞の際に学会長の先生に握手とともに「これからも頑張ってください」と言われたので、その言葉の通り、これからも研究に力を注いでいきたいと思えます。

一方で反省点もあり、自分はまだ英語の発音が未熟だと痛感しました。アジアの国際会議なのでネイティブの方は少ないですが、海外の方を中心に、流暢な英語を喋る方が多く見受けられました。日本のベントス学会長の先生からも、近い将来ヨーロッパの海洋生物会議にも参加できるように、英語力を磨くよう指摘をいただきました。海洋生物学は、ダーウィンやチャレンジャー号の時代から、ヨーロッパがその中心となってきました。また、太平洋の種と大西洋の種を比較することで見出されてきた理論も多々あります。この先、世界を視野として持った研究が出来るように、研究内容を豊かにすると同時に、英語力を鍛えていきたいと思えました。